

ウスバキトンボが京都大学瀬戸臨海実験所北浜 (和歌山県白浜町) へ漂着

Pantala flavescens washed ashore at Kitahama beach of the Seto Marine
Biological Laboratory, Kyoto University (Shirahama Town,
Wakayama Prefecture)

久保田 信

2016年の6-10月にかけて、海上を渡るウスバキトンボ *Pantala flavescens*が、北浜をはじめ京都大学瀬戸臨海実験所構内で観察された(久保田, 2017)。2017年の夏季にも、本種が多数、毎日のように当該区域を飛び回った。2017年9月1日、日の入り直後の周囲が暗くなり始めた時刻に、北浜で本種の1個体が波打ち際で波に揉まれているのを初めて発見した。

この1死亡個体には、傷んだ所が全く見られなかった(図1)。この個体は北浜付近で自然死したのかもしれないが、折からの小笠原諸島付近から本州の東北沿岸に接近して移動した台風15号がもたらした強風と荒波で、どこかで海面に不時着し死亡漂着したのかもしれない。このような前例として、本種の実験記録が静岡県で1979年に観察されている(宮川, 1979)。北浜の本例も海難と推察されそのような理由があり、それは、翌日にも以下に記録する様に、複数の翅が漂着したからである。

9月2日、多数の翅が波打ち際で、海藻や海草などと一緒に漂っていた(図2)。海に胸まで浸かって、前後左右あわせて20枚の翅を海表面付近から採集した。この他に、3枚が浜に打ち上がっていた(図3)。打ち上がった翅は、折からの強風ですぐ乾燥し、砂浜を飛んでいったので、もっと多くの翅が打ち上げられていたと推察される。

9月3日と4日の朝と夕に、本種の漂着や波打ち際への吹き寄せを念入りに調査したが(毎度の様に、北浜の約400 mの満潮線を往復するとともに、今回は水深2 mまでの海岸線200 mの間をジグザグに目視)、翅も個体も発見できなかった。その後の9月5日以降、1日に1回⁷の継続定期調査でも本種の漂着はずっとなかった。本種は昨年と同様(久保田, 2017⁷)、10月中旬頃に構内から姿を見せなくなった。

謝辞

原稿に目を通し、貴重な文献やアドバイスを頂いた新井 裕氏に深謝致します。

参考文献

- 久保田 信. 2017. ウスバキトンボ(トンボ科)の京都大学瀬戸臨海実験所構内(和歌山県白浜町)への出現. KINOKUNI, (91): 12-14.
宮川幸三. 1979. ウスバキトンボの海難記録. TOMBO, 22(1-4): 23.



図 1

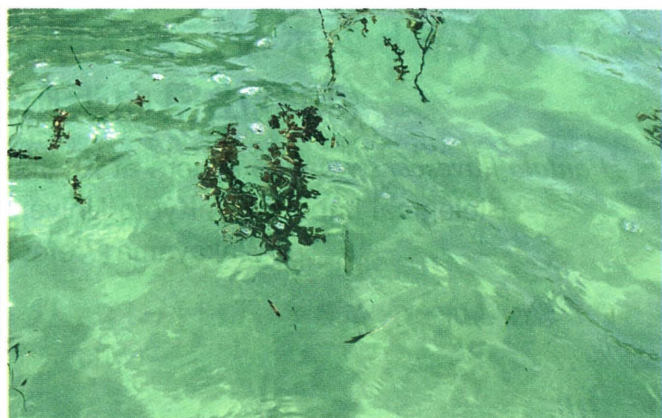


図 2



図 3

図 1 - 3 京都大学瀬戸臨海実験所北浜に打ち上がった
ウスバキトンボ個体(1)と一枚の翅(3)、および
波打ち際で海表面を漂う翅(2)

(くぼた しん 〒649-2211 西牟婁郡白浜町臨海459

京都大学フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所)